

こんな先生
いるよ！

ことばと文化を

未来へつなぐ

言語教育の実践

教養教育研究院 野田キャンパス教養部 助教
オンディバ・ヘスボーン

Ondiba Hesborn 先生

背景の文化まで伝える言語教育を

どのような研究をされていますか？

研究は大きく分けて二つあります。一つ目はユネスコで2003年に消滅危機言語に指定された、母国・ケニアの「スバ語」に焦点を当て、言語保存とAーベースの教育ソリューション開発を行う研究です。スバ語を使う先住民の日常会話や口承文化、農業や漁業などに関する知識等を記録し、データのデジタル化と注釈付けを進めています。さらにこのデータを、発声練習や音声対応クイズ、語彙ゲームなどで文化的背景まで学べるAー学習教材の開発につなげることでスバ語の継承を目指します。二つ目は、大学生の英語教材にドラマを活用することで、より深いコミュニケーション力と自己表現を促すという教育法の研究です。

また、これらの研究以外に、国際学術連携および日本・アフリカ交流事業の推進を行っています。昨年からは理科大にケニアのストラスモア大学より学生・教員を迎えて「日ケニア共創シンポジウム」を開催しており、2026年5月の第2回では、35名が来日しました。私は言語教育においてはその背景にある文化まで学んでほしいと考えており、だからこそ交流事業は非常に意義あることと思っています。

私はかつて、日本政府が設立に関わったケニアの大学で農業技術を指導・研究していました。一緒に働く日本人スタッフは、きちんと時間を守り、責任感もスキルも高く、それでいて温厚で優しい方々でした。こうした国民性を育む日本文化を知りたくて、2014年に留学のために来日しました。理科大に来たのは2024年です。授業は英語で行うため英語を学ぶ目的の学生も授業を受けています。ケニアと比べると日本の学生はシャイですが、やはり責任感があり、真面目です。

ケニアと日本、二つの故郷

日本での暮らしはいかがですか。

ケニアには、59の国立公園・国立保護区・動物保護区があり、手つかずの大自然があります。42の民族で構成される多様でフレンドリーな国民性など



スバ族の漁師や農民から日常会話や伝統知識を収集したフィールドワーク（2025年8月）



3年前に初めて子どもたちを連れてケニアへ里帰した



ケニアのストラスモア大学から学生と先生を迎えて理科大でシンポジウムを開催。2026年は35名が来日した（写真は2025年）

も含め素晴らしい国ですが、12年暮らす日本も大好きです。ケニアには生ものを食べる習慣がなく、私はまだ食べられません。妻は刺身もOK、卵かけご飯や納豆も大丈夫です。小6の息子は茨城県U12のサッカー選手です。小5の娘もバスケットをしていますので週末は応援三昧です。3年前に初めて一緒にケニアへ帰省しました。ケニアでは年末年始の長期休暇は親戚が集まりにぎやかに過ごします。妻は8人きょうだいなので大人数でしたが子どもたちはすぐに仲良くなりました。子どもたちは最近、祖父母とZoomで会話しながらスワヒリ語の勉強を始めました。「ミニ（私）」など、日本語と似た発音の言葉が多いので覚えやすいと思います。

藤沢享乃（ジエイクリエイト）